



小さきもの



景色がモノクロで見えるから、何色をしているものなのか、僕にはわからなかった。白黒の強弱と嗅覚と触覚で、それが何なのかを当てなきゃならない。それは想像以上に難しいことで、間違えると体に悪い影響があるから、僕は真剣になってモノ当てをする。ほとんどの場合、それが食べられるかどうかのチェックだ。もちろんママを疑っているわけじゃない。ママは規則正しくはないけれど、一日二食、僕にごはんを作ってくれる。僕が食べ物を調べるのは、毒が入っているかどうかではなくて、散歩に出たときに道端に落ちているものを食べていいのか判断するための練習のようなものだ。意地きたないって言わないでほしい。僕たちにしかわからない必要栄養素があるんだ。それはママが読んでる本にも書いてないことだと思う。

僕の仕事はママのように街が暗くなったあとにお店に行くことではない。もちろん会社に行くわけでもない。ママは僕に「癒し」を求めているんだって、はじめて会ってから何日かしたときに話してくれた。僕はキレイなママが好きだったし、いっぱい撫でてくれて温かかったから、ママの求めに応じようと決めたんだ。僕はそういう存在。ニートでも引きこもりでもない。家の中でママと一緒に遊んで、たまに外で散歩して、一緒に眠る。ママをできるだけ幸せにしてあげることが僕の仕事。ご褒美は美味しいごはん、ママの愛情。僕の生きる意味はそこにあるんだ。

さっきママが仕事に出かけた。今日のワンピースは華やかな黒をしていた。ママは黒や紫のキラキラした服が好きみたいだ。僕もママの服が好きだ。きらびやかでキレイで、僕の自慢のママだ。

ママは僕にごはんを作ってくれていた。ドライフードにちょっとだけ鶏肉の入った僕の大好物だ。僕はまずは鶏肉から食べて、まだ食べれそうなときはドライフードも食べるようにしている。

「うん、おいしい」

部屋には僕しかいないから、ひとりごとではあるけれど、ママへの感謝の気持ちを込めて呟いた。鶏肉自体には味付けをしていないけれど、ドライフードの味が鶏肉にちょうどいいダシになっている。僕が一口で食べ切れるサイズになっていて食べやすい。ママの細やかな気配りが僕には嬉しかった。

「さて、何をしようかな？」

ママは夜出かけると、朝になるまで帰らない。僕は日中も寝ることが多いから、じつは夜はそんなに眠くはない。ママがいるときはいっしょに眠るけど、結構寝たふりをしているだけって日も多い。

僕がこの家に来た次の日に、ママはオモチャを僕に買ってくれた。骨の形をしたぬいぐるみ、噛むと音がするボールとかだ。僕は留守番が多いから、最初はそれで遊んでいたけど、すぐに飽きてしまった。それはそうだろう。特にそのオモチャで何かの目的を達成できるわけでも、メリットがあるわけでもないのだから。だから最近は、部屋にあるもので遊ぶことにしている。たまにママに叱られるけれど、暇な日々を少しでも楽しくするためには仕方のないことだ。

前から気になっていたのは、ママが食べているタバコっていうお菓子だ。食べているときに白い煙が出ていて、そのときのママはリラックスしていて、煙を吐き出す表情がすごくカッコいい。僕もあんな風に食べてみたいと思っていた。

部屋を見渡すと、テーブルの上にタバコがあった。でも新品じゃなくて、ママの食べ残したタバコが、金属の皿に入っていた。僕は背伸びをして、テーブルの端に前足をのせて、皿を引き寄せた。

ポト！

力加減に失敗して、皿をフローリングに落としてしまった。皿からは数本の食べ残しのタバコがばらまかれ、床には灰色の粉も散乱してしまった。

「やっちゃった。これはママに叱られるパターンだ」

と思ったが、首を傾げてママを上目づかいで見れば、簡単に許してもらえるから、そんなに心配はしていない。

僕は散らばったタバコのうち、いちばん長いやつを嗅いでみた。最初に鼻についたのは、ママの口紅でピンク色になっている部分の薬品の匂いだ。先の方を嗅いでみると、葉っぱの匂いがただけけれど、変わった匂いだ。少しだけ危険な気がした。僕は警戒心を持ちつつ、先の方の葉っぱを少しだけ口に入れてみた。

「苦い！ペッ！」

あまりの苦さに僕は口にいれた一瞬後にタバコを吐き出した。これは食べものではない。たぶん食べたら体に悪い何かだ。ママにも食べない方がいいことを何とか伝えようと思った。僕は床に散らばったタバコを一ヶ所に集め、灰色の粉もできるだけまとめておいた。この方があとでママが片付けやすいはずだ。もしかすると褒めてもらえるかもしれない。

嫌な匂いを嗅いでしまったから、僕は急に尿意を覚えた。部屋の隅に僕専用のトイレが置いてあって、ママから「おしっこはそこでしなきゃダメよ」と教わった。トイレは壁に立てかけている部分と、地面に置いている部分で構成されていて、横から見ると、ちょうどL字型になっている。その形に沿って青い紙が敷かれている。僕はトイレに駆けよると、右の後ろ足を上げ、壁側の青いシートに向かって放尿した。壁から垂れてくるおしっこが他の足に当たらないように位置を微調整するのだけれど、それがなかなか疲れる。やったことのない人にはわからないと思う。おしっこをした後にトイレを見てみると、少しだけシートから外れて壁にかかっていた。僕は自分では何もできない無力さに落胆する振りをして、静かに前を向いた。

自分のトイレが終わった後、落雷のように閃いたことがあった。ママのトイレを調べることだ。そういえば、まだ見たことがなかったのだ。僕は玄関に続く廊下に出て、キッチンを目に見ながらトイレの前まで歩いていった。トイレを開けるノブはだいぶ高いところであって僕の身長では届かないけれど、幸いちょっとだけドアが開いていたので、僕はその隙間からトイレに侵入

した。

僕のトイレとは違い、ママのトイレはバラのよい香りがした。ママは花が好きで、花柄の洋服もたくさん持ってるし、散歩のときも花がたくさん咲いた道路を歩いてくれる。ただ、バラに関しては公園には咲いていなくて、前にちょっとした旅行に連れて行ってもらったときに、バラ園で嗅いだ匂いを僕は覚えていた。

トイレの形は僕のものとはだいぶ違って、白くて硬い形をしていた。僕はどうやって使うのかわからなかったので、とりあえずトイレの縁に前足を乗せ、中を覗き込んでみた。下の方に水がたまっているのが見えた。おそらくトイレが終わった後に水で流せるようになっているのだろう。ママのトイレは臭わないように、きれいにできるようにしているのを初めて知った。一方、僕のトイレは毎回水で流すようなものではない。数日おきに一回、シートを交換するタイプのものだ。そのまま放置すれば部屋中が僕のおしっこ臭で充満してしまうのを、ママが部屋に芳香剤を振りまいて防いでいるのだ。ファブリーズというスプレータイプの芳香剤で、最初は匂いつきのものだったが、僕がその匂いにくしゃみをしていたためか、無香料のものにしてくれた。話をママのトイレに戻そう。トイレ自体はさっきも言ったように白くて硬くて水で流せるようになっている。トイレの横にいろんなボタンのついたコントローラーがあるから、これで水を流したりできるのだろう。トイレ本体の探索は完了だ。僕は次にトイレ内の探索に移った。

壁に紙が巻かれたものがついている。これは何に使うのだろうか。部屋の中にあるティッシュと同じなのかもしれない。ふと視線を床の方に向けると、床の角にひっそりと置かれているプラスチックの箱があった。

「ああ、この匂いか」

と僕はすぐに理解した。僕がトイレに入ったときに感じた匂いはバラの香りがほとんどを占めていたのだけれど、その中に変わった匂いが混じっている気がしていたのだ。箱を見て、この変わった匂いがどこから来ているのか、僕は直感した。僕は前足で箱のふたを開け、怖いものを見るようにそっと覗いてみた。

「これはなんだ！まさか、血？」

僕はとっさに身を引いた。箱に入っているゴミについた血に恐怖を覚えたからだ。四つ足がブルブル震えているのを感じる。僕とママの日常生活で血なんて見る機会は滅多にないのだ。ママがトイレの中で怪我をしたのだろうか。毎月何日か、ママは体調を悪くして仕事を休むことがある。怪我をしたから休んでいるのかもしれない。僕はママが休んだときは、一日中ママと一緒にいられるから、その日々を待ち遠しくしているが、ママが怪我をしていることを知ったいま、自分の浅はかな行動が悔やまれる。具合の悪そうなママに、無理矢理ちょっかいを出して、ママにつらい思いをさせていたのかもしれない。今度ママが休んだときは、ママをゆっくりと寝かせてあげよう。それが男としての気づかいだ。

ガタン！

突然、トイレのドアが閉まる音がした。僕はその大きな音に驚いて後ろを振り返った。嫌な予

感がしていたが、やはりトイレのドアが閉まっていた。恐る恐る上を見上げると、僕の身長では絶対に届かない高さのところに、まるで僕を見下ろすような顔をしたノブがいた。銀色のノブが景色を反射させていて、その中には横に伸びて馬鹿っぽい顔をした僕がいた。ノブの丸みが作り出す僕の顔は、目が垂れて、口がやけに開いた、楽しそうで悲しい顔をしていた。

僕は助けを呼ぼうと、ドアに前足の爪を立て、ガリガリガリ、と引っ掻いてみたが、もちろん誰もドアを開けてくれない。背後から血の臭いが忍び寄ってくる。僕は恐怖に包まれながら、その場に立ち尽くすしかなかった。

徐々にトイレ内の室温が下がってきた。

僕は長い毛に覆われているけれど、それでもだんだんと寒さが襲ってきた。

狭い部屋に閉じ込められることが、どれだけ人の心を不安にさせるかを知った。

そして、おそらく外の世界では、夜が更けていくのだろう。

．．．。

．．．．．。

．．．．．．．．．。

あれから何時間が過ぎたのだろう。玄関の鍵をあける音がした。ガチャガチャという急かしたような音が、トイレのドアごしに聞こえてくる。ママが帰ってきたのだ。

トイレの外から、ママがばたばたと大きな音をたてている。バックとか、携帯電話とか、タバコとか、いろんな荷物を床に置いているのだろう。そして、僕を呼ぶ声がする。

「僕はここにいる！」

とすぐにでも伝えたかったが、何となく自分から助けを呼ぶのは気が引ける空気を感じていたので黙っていた。ママの僕を呼ぶ声がだんだん大きくなってきた。やがて叫び声に変わってきた。ママは僕が部屋の中いないことに気づいたのだ。もう少しでママに助けてもらえる。僕はママへの申し訳なささと、助けてもらえる喜びに、何ともいえない気持ちになった。ママが助けにきてくれたら、どんな顔を見せればよいのだろうか。いつものように上目づかいで甘えた声で「ありがとう」と伝えてあげよう。

そしてトイレのドアが開け放たれた。

「くうん」

僕は首を傾げ、上目づかいをしてママを見上げた。

「あ、トイレにいたよ！」

玄関からの逆光に目が慣れたところで、見上げた先には、知らない男がいた。僕はその男の足首に噛みついてやった。「痛！」と大声をあげた男のわきから、大好きなママが現れた。喜怒哀楽を同時に表現していたママに向かって、本来なら僕は例の上目づかいの表情を送ってあげないといけないと思うけれど、いつも知らない男たちを連れて帰ってくるママは嫌いなママだから、上目づかいはしてあげないことにした。

トイレにはキレイな女神様なんていない。血の臭いも怖いし、閉じ込められるのも孤独で寂しい。でも今日だけは、トイレの中に閉じこもろう。だって、ママが知らない男をつれてきたときは、僕にもふだん聞かせてくれないような声を出すから、できるだけ聞こえないところにいたいんだよ。わかってくれるよね？

～ 完 ～